

里山チーム最終発表

・背景

現代において里山は、様々な開発の波を受けて減少している上に、現代的な生活の中では生活とのかかわりが薄れており、適度に人間の手が加わることによって維持されてきた生態系や自然環境が変化しつつある。このような状況を改善するため、全国各地の里山において、保全活動を行うための組織がいくつも設立された。今回の対象地である大青田の森でも、2004年に発足したNPO法人ちば里山トラストが保全活動を行っており、管理区域内での保全活動や、里山活用のための実体調査や生態の研究だけでなく、柏市のあけぼの山の行公園における教育・レクリエーション事業など幅広く活動を展開している。しかし、団体の構成員の高齢化率はかなり高く、こうした活動を積極的に参加する担い手の創出が求められている。



写真1 NPO活動の様子 (<https://osatsuyama.jimdo.com/> より引用)

・課題

1. 大きな課題

NPO法人ちば里山トラストは高齢化問題に直面しており、新しい担い手、特に若い世代の参入と里山周辺の住民達の協力は、里山の自然環境維持に必要不可欠である。

2. 小さな課題

- ①地元住民は、日常的な里山保全に携わる運営側にはならない。
- ②NPO法人ちば里山トラストは多数のイベントを開き、1000人以上の参加者を集めたが、参加者にとって一時的な興味にとどまってしまうのではないか。
- ③管理区域の入り口には看板などではなく、ロープが引かれているため入りにくい。

・提案のコンセプト

里山の自然環境を維持していくためには、その活用方法について今一度考える必要がある。現状の担い手の意見、および近隣住民がこの区域についてどういう印象・意見があるのかといったことを踏まえて、提案を考える。

・活動内容

1. ちば里山トラストの会員に対するインタビュー

実施日：2021年6月5日

・目的：

現状の担い手であるちば里山トラストの会員の方たちが、会員として活動を行う理由や、実際に保全活動を行うなかで感じたことについて知るとともに、里山という環境をどう捉え、今後どうしていきたいのかといった希望を聞くことで、後述する地域住民へのアンケートと合わせて自分たちが起こすアクションの方向性を探る。

・調査結果：

①活動を始めた理由

活動を始めた理由としては多種多様で、定年になって何かをやりたい、ボランティア活動や地域貢献をしたいといった何らかの活動に参加することを目的としたものや、小さい頃からこういった自然が好きで活動に参加している方もいた。

②メンバーの多様性

柏市内だけでなく遠方から参加する会員もおり、近隣地域から参加している人はごく少数であった。基本的なコンセプトに合意はあるが、活動の目的は前述の通り人によって異なり、各自の特長と好みを発揮し、やりたいことがあったら自由にやっていいというスタンスで各員が活動を行っており、草刈りや倉庫の建設、木の伐採といった保全活動について自然に役割分担が行

われているということだった。

③これから新しくやりたいこと

ツリーハウスや遊具などの設置を上げる方がいたが、公園化してしまうことに対する反対もあり、実現は難しそうだった。刈った草を用いて肥料を作るといった自分なりの里山利用を考えている方もいた。

④活動中に感じた困難

開発により森が減っていること、新しい会員が入らないことを挙げる方が多かった。また、管理地入り口のロープについては、あくまで私有地であるという制約上、開放するのは難しいということだった。しかし、実際に森の中に入ってみないとわからない魅力がたくさんあるため、活動日であれば見に来てほしいという意見もあった。

⑤トラストの活動を知ってもらう入り口

知り合いの紹介や、あけぼの山農業公園でのイベントなどをきっかけとして会員となった方もいたが、団体のホームページを見て会員になった人が非常に多かった。



写真2 インタビューの様子 (<https://osatsuyama.jimdo.com/> より引用)

2. アンケート

調査地域：千葉県柏市みどり台 調査期間：2021年7月 回収数：95件

・目的と手法

将来的に里山の自然環境を維持していくためには、継続的な担い手が必要である。継続的な担い手になりうる可能性の高い地域住民が会員に少ない原因を探るとともに、大青田の森自体や、ちば里山トラストの活動に対する印象を調査することで、今後の方向性を探る。印象やイメージといった抽象的な答えを求めるものが多かったため、自由記入欄を設けつつ、想定される回答を選択肢として設ける形の質問形式とした。

・調査結果

①回答者の年代

表1 回答者の年代

回答者	人数	比率
30代	6	6.52%
40代	7	7.61%
50代	12	13.04%
60代	12	13.04%
70代以上	55	59.78%

②里山に関する印象やイメージ

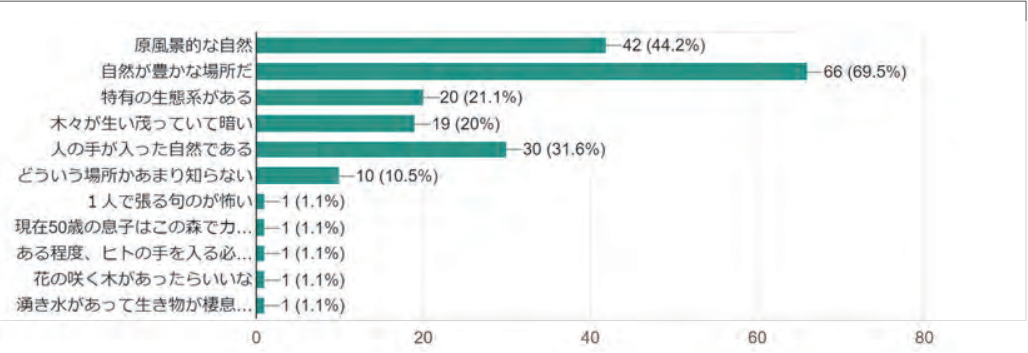


図 1 里山に関する印象やイメージの回答

③自然の中で子供に遊んでもらうとしたらどのようなことをさせたいか
「自然観察」、「昆虫採集」、「キャンプ」が上位を占める中、「ドックラン」や「工作物作り」「木登り」「ハンモック」などの提案があった。

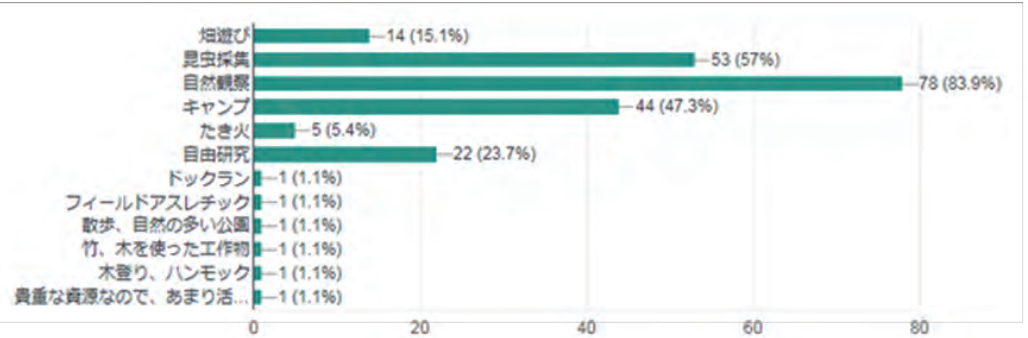


図 2 ③の質問の回答

④ NPO 法人ちば里山トラストの活動に対する認知度
全体的な認知度は、18.2%だった。将来的な担い手として期待できる30~59歳の25人のなかでは、活動を認知しているのは2人だけで、認知のきっかけはホームページと柏市の里山紹介冊子であった。活動を知るきっかけとして多かったのは、口コミ、カシニワの紹介冊子、新聞雑誌であった。
⑤ちば里山トラストの活動に対する感想や要望
活動は地元の環境保全にとって大事である；入口をわかりやすく整備してほしい；安全に遊べる施設を整備してほしい；宣伝にもっと力を入れてほしい；里山保全に参加したい

入口の網は不要。入口に詳しい案内
もっと入口が入りやすければ、安全だとわかれば、利用しやすいです。
すぐ近くで大規模開発しているので、数年後車の量が増えるのではと、気になる。開発が広がらないように願っている。
自動車侵入禁止にして、自然の管理を厳しくしてもらいたい。
ロウバイの種と2〜3年の苗があるので、植えてみたいです。
特に夏は涼しいので散歩によく行ってたが散歩中にひと休みするのにベンチが2〜3力所有と最高!!
管理区域があることは知っていましたが、NPOの目的、活動内容は全く知りません。地元の協力（高齢者でも役立つのであれば）が必要であれば、広報活動も必要だと思います。
自然のまま出来れば手を加えず残してほしい
子どもが安全に遊べる場所だと嬉しい
暗く危険な感じがするので明るく安全なイメージになると良いと思います
空き家が増えているのに、森林はどんどん伐採されています。今のうちに森林の保護をしないといけないと思います。常磐道の側道付近の森林は伐採されて、空気感が変わりましたよ。
自由に自然散歩などができる場所であって欲しい。個々の植物名などが分かるようであれば更に楽しい。
何か活用されているのでしょうか？情報が来ないのでわかりません。
子供達の好きそうなイベントを開催して宣伝する（＊キャンプをする、など）
子ども達が自然の中で遊べるアスレチック、虫探しなどのイベント、工作教室、じゃぶじゃぶ池などを作ってほしい。

図 3 ⑤の質問の回答一覧

地域住民のほとんどが、大青田の森について「これからも残していくべき自然」として認識しているものの、ちば里山トラストが管理している区域に関する認知度が低いため、この回答の多くは里山の保全とは異なる文脈での回答だと考えられる。また、活動自体を把握している人が少なかったため、今回のアンケートは一定の宣伝効果を果たしたのではないかと考えられる。
管理区域および大青田の森の印象として、暗い・入りにくいといったものがあり、管理区域がどこであるかという認知度も低い。そのため、何らかの導線デザインを行うことが必要であると考えられる。

よって、インタビューとアンケートの結果を踏まえ、アクションの方針を「ちば里山トラストによって保全活動が行われている区域について近隣住民に知ってもらうこと」とした。具体的には、「管理区域の入り口に設置する

看板の製作」と、子供世代、親世代の双方への認知度上昇を目指した「子供向けイベントの開催」を行った。

3. 看板製作
制作期間：9月
ちば里山トラストの保全活動が行われている管理区域の入り口を示すとともに、中に入ってどのような活動が行われているのかを見ることができる活動日を示すことで、散歩で通りかかった地域住民の興味を引くことを目指して製作した。
なお、現段階では設置がなされておらず、細かい設置場所、設置方法については今後調整していく。



写真 3 製作した看板

4. 「里山探検隊～葉っぱで遊ぼう～」イベント
開催日：10月2日 参加者：子ども9人、大人7人
・目的
「葉っぱ遊び」をテーマに、子どもたちが里山で自然と触れ合う機会を作ると同時に、その親世代にちば里山トラストの保全活動を認知してもらうこと、さらに、保全活動に対する興味を向上させることを目指した。イベントの内容については、森での楽しい思い出をモノ化する要素を組み込むことによって、今イベントにおける体験の記憶を維持・延長させることを狙った。
・イベント内容
①葉っぱ探検隊
ちば里山トラストの会員の方の協力を得て、管理域内の植物を紹介していただきつつ、目についた植物の葉を収集するという、管理区域内の自然と直接触れ合うアクティビティとして企画した。
②葉っぱしおり
前述の「葉っぱ探検隊」中に集めた葉っぱを、折り紙と一緒にラミネートフィルムで挟み込みしおりを製作する。
・当日の実施状況

子供たちは予想以上に活発に動き回り、葉っぱ以外にも落ちているどんぐりや栗、虫なども採集し、準備していた活動が終わるとすぐに別の遊びを思いつき実行し始めるなど、こちらが想定していた以上のアクティビティとなった。



(←) 写真 4

「葉っぱ探検隊」実施中の様子。当日は子供たちだけでなく、親世代も管理区域内を歩き、観察に参加していた。



(←) (へ) 写真 5・6

「葉っぱ探検隊」実施中の様子。子供たちから質問をすることもあった。

(↓) (↑) 写真 7

しおりを製作中の様子。早めに作り終えた子はすぐに新しい葉っぱを取りに行っていた。



(←) 写真 8

集合写真。予定よりも多くの人に参加していただいた。

・今後の展望

今回はちば里山トラストの会員と近隣住民との両方の考えを踏まえ、管理区域の「顔」となる入り口の看板と、近隣地域の子どもたちを糸口に、アクションを考えたが、今後も新しい担い手と呼び込む持続的な発信は必要であると考えられる。情報社会において、インターネットの力は大きい。実際に会員の中で、ホームページをきっかけとして参加し始めた人は多かった。こうしたインターネットを用いた宣伝の一つとして、写真を伴う SNS を用いた活動内容及び活動日の発信が提案できるのではないだろうか。

また、今後の担い手創出のために、近隣住民たちの協力も欠かせない。地縁コミュニティに関しても、中年層の取り込みを行いたいという同様の課題を持つと考えられる。よって、チームばんばんのような地縁コミュニティと連携した活動の展開も期待したい。たとえば、里山のなかで広場を使って歌声サロンや芋煮会を開催できるように、管理区域を条件付きで開放するといった仕組みができれば、場所の魅力を知ってもらうきっかけが増えるのではないかと考える。